

平成 18 年 11 月 17 日

東京会場

於：湯島聖堂

中齋塾準備フォーラム 講話

中齋塾フォーラムの目的について、少しお話し致します。

パンフレットをご覧ください。

世界は今危機に瀕しています。残念ながらその現実を見ようと思わず、又知らせようとも思わない識者が多いと感じます。この機にあたり、知足主義を根底に本質・大局・歴史の判断三原則に基づいた時代洞察の眼力を養い、木内信胤先生流の総合的直観力を身につけたいと願い、提言行動する場を創り出すべく、フォーラムを企画致しました。

先日、中齋塾フォーラムの顧問とお話し致しました。

顧問は環境問題で国際的に活躍されています。

その方が「世界全部が破滅に向かってまっしぐらに進んでいる。誰にでも分かる明確な形になるのは、2015 年頃だ」と、非常に危機感を持っておられます。

なぜこのような酷い状況になってしまったのか。

マスコミはなぜ現実の大事な事を知らせないのか・・・という話になりました。

顧問曰く

「フォーラムに来て戴いた方々は、深澤さんの話を聞いて満足して帰るだけでは困るのです。出て来て話を聞いて“なるほど”と思ったのが行動で、それで終わったのでは、深澤さんのやろうとする意味がない。話を聞いて何らかの行動に出て、それで始めて中齋塾フォーラムは良かったと言えるのです。くれぐれも深澤さんの話を聞いて、満足して帰る人を作るだけには終らないで貰いたい。」と注文されました。

私はこの中齋塾フォーラムで、判断基準の実例をどんどん出して、最終的には判断の三原則<本質・大局・歴史>を身に付けて戴くように進めたいと考えています。

それを進めていくと、時代洞察の眼力を養う事ができる。

その時代その時代どうだったか、という事が見える。

そういう体験を積み重ねると、判断の三原則など考えなくても、自然と自分なりの結論がすぐに出るようになります。

それが、木内信胤先生が言っておられる「総合的直観力」です。

私はそれを身に付けたいと思って、今努力をしています。

最終的にはこの中斎塾フォーラムは、< 足るを知る > という所に全部集約します。

知足・・・何事もほどほどで行きましょう。

< 足るを知る > という所で、中斎塾フォーラムを集約させようと思っています。

木内さんから、「実際にどう行動に移るか、何か一つに集約して下さい」とアドバイスを戴きましたので、具体的な行動指針を作る事を約束致しました。

皆さんとご相談したいと存じます。

では、本日の講話に参加します。

まず素読の体験を致しましょう。

素読の基本は三つです。

背筋を伸ばす。

次に、目線を定める。

前方少し上を見て下さい。

三番目、気持ちの良い声を出して下さい。

(素読)

「**学ばざれば則ち罔く、思わざれば則ち殆し**」

「**性相近し、習い相遠し**」

「**利によりて行なえば、怨み多し**」

人間が声を出している時は、強い身体になります。

素読で実際に声を出したら、気持ちが良いものです。

皆さんも味わって下さい。

何事も体験は大事です。

体験すると、身体に沁み込みます。

例えば税金を考えますと、日本の政府は間違いなく国民のお金を収奪しようとしています。

「税金が何%上がります」と言われても、それだけではピンと来ません。

しかし我が身に降りかかって、現実に高額な税金を持っていかれたら痛いですね。

我が身に感じるという体験をしましょう、という事です。

素読は体験という事の効用の素晴らしさを味わわせてくれます。

もう一点、素読について申します。

素読は、今に始まったものではありません。

江戸末期・明治・大正・昭和前期の知識人・教養人と言われる方が、身に付けていた学問の手法です。

人間が人間として生きていく上には、織物で考えると、縦糸がびしっと通っていなければなりません。

基本がきちり出来上がっていて、つまり縦糸となる背骨が通ると、横糸が広がってきます。

縦糸がしっかりしないで、横糸だけが広がると、ぐずぐずになります。

我々が今、素読で体験しているものは、縦糸をしっかり身に付ける事です。

素読をすると、声を出し、耳で聞き、眼も頭も活用できます。

どうぞ皆さんも、論語だけでなく自分の好きな本で結構ですので、是非声に出して読んでみて下さい。

そうすると書いた人との対話ができます。

書いた方が亡くなっていたら、亡くなった人との対話ができます。

次は、陽明学についてお話し致します。

陽明学は儒学の大黒柱の一つです。

今日本は親が子を殺し、子が親を殺すような事件が、連日のように報道されています。

儒学は「親を大事にしましょう」とか「子供をきちんと育てよう」という考え方を、根底に持っています。

そして儒学の根幹には、それをどんだん次の世代、次の世代に伝えていこうという「述」という考え方があります。

「述」とは、伝える・バトンタッチするという意味です。

「述」とは、孔子が言い出して、現在にずっと繋がってきている儒学の最大の背骨です。

陽明学はどうして生まれたか、流れを説明致します。

孔子が出て、儒学が生まれました。

論語が経典として残り、後世の人達はずっとそれで勉強していたけれども、「論語はこう読むべきだ」とか「孔子はこう説いたのだ」と高らかに主張する者が現れました。

それが朱子です。

朱子学ができて、皆一所懸命勉強するわけです。

朱子学的な考え方で、中国は科挙の制度を作り進んできたわけです。

朱子が亡くなって暫く経つと、「読み方ばかりを重視して、日常に役に立たないのではないか?」「この勉強の仕方では解決できない」・・・と、王陽明が一人、大きく旗を振ったわけです。

そして確立されたのが陽明学です。

陽明学はまず体験をすること、行動に移る事を重要視している学問です。

陽明学が日本に入ってきて広がり、明治維新の時には、陽明学の考え方が維新を成功させる最大のエネルギーになりました。

江戸時代の大儒学者佐藤一斎のお弟子さんの、山田方谷と佐久間象山。

山田方谷のお弟子さんの、三島中洲・河井継之助。

佐久間象山のお弟子さんの、吉田松陰と小林虎三郎。

番外で西郷隆盛がおりますし、又、吉田茂は佐藤一斎の孫娘コトが躰けた人ですから、陽明学が身体に沁み込んでいるはずですよ。

・・・という事で陽明学は、今の日本にそれぞれの方達が意識するしないにかかわらず、色濃く影響を及ぼしています。

我々が勉強する時には机の上だけでなく、是非行動から学ぶようにしましょう。

行動して考える事です。

陽明学に「事上磨練」という言葉がございます。

日常生活の中で自分を磨こうと思っていれば、何でもお手本になります。

机上の空論ではいけません。

実生活の中で学んで身に沁み込んでくるものは、その人をどんどん成長させ、社会の中で役に立つものです。

又、「知行合一」という言葉がございます。

知るという事は、行動の裏付けがあって始めて、「知っている」と言えるのです。

自分で体験し納得して、腑に落ちてから口に出すべきで、一知半解ではいけません。

では、今の日本・これからの日本についてお話し致します。

山田方谷と上杉鷹山については、何回もお話ししていますので、ご存知かと思います。

山田方谷がどれくらいの借金をどうやって返済していったか、覚えておられますか。

山田方谷が備中松山藩の再建を任された時に、今の会社で考えれば年商 20 億くらいの会社で 100 億円くらいの借金があったわけです。

それを 8 年間で全額を返済し、同時に 100 億円の蓄財をしました。

日本を作った事例ですから、是非調べてみると良いと思います。

上杉鷹山がやった改革も有名ですが、借金返済に 100 年かかりました。

山田方谷は 8 年です。

山田方谷は、「重箱の隅をほじくるような税金のかけ方をする国は滅ぶ」と明確に断言しています。

翻って今の日本を見ると、税金をどんどんかけまくっていますね。

知らない間に税金が変わっています。

今は所得税が 37%、住民税が 13%、その他の税金を入れるとすごい金額です。

それが今の日本です。

今の日本を調べるのには 60 年前の日本を調べればよい、と以前にも干支学についてお話し致しました。

60 年前の日本を調べたら、その前の 60 年前を調べれば良い。

60 年前の日本は、昭和 21 年 2 月 17 日付けの新聞を調べて下さい。

60 年前の日本はどうだったか・・・。

税金で言うと、お金持ちには富裕税といって最高税率 92%をかけました。

土地・建物・現金、とにかく丸ごと巻き上げたわけです。

そして金融緊急措置令で、一般大衆のお金は全部銀行に預けさせて、下ろせるようになった時には使えないものになっていましたから、やはり丸裸です。

これが 60 年前です。

その又 60 年前は、西郷隆盛の西南の役の後始末で、やはり凄まじいインフレでした。

ですから日本がどうにもならない時は、常に特政令で借金をチャラにして辻褄を合わせてきたのです。

このように 60 年前・60 年前と遡って調べる事は、干支学という観点で見えています。

これからの日本を考えるには、ネバダレポートで見れば良いでしょう。

ネバダレポートについては、皆さんもご存知ですね。

IMF の調査官と日本の官僚が作ったもので、その当時国会で答弁した柳沢金融再生担当大臣が、今又登板していますから、当然それをどんどん推進すると思います。

怖いのは、「さあやるぞ！」というのではなく、なし崩しのうちにやる事です。

日本国民全体が茹で蛙になっているから、はっと気が付いて飛び出そうと思った時には、茹で上がってしまって飛び出す氣力がなくなっている。

今日本はどんどん茹で蛙の状態になって来ていますから、ネバダレポートを真剣に研究し、活用していくのが良いと思っています。

最後にまとめますと、今私がここでお話ししたものは、どうぞ自分で調べて戴きたいと思います。

60年前の日本を調べるのであれば、国会図書館に自分で行って、マイクロフィルムを自分で回して現実に当時の新聞を見してみる。

そうすると実感が違います。

私が話した事を聞いてメモするのでは、少ししか残りません。

インターネットも氣をつけないと、間違っている場合がありますから、単なる手がかりでしかありません。

原典に当たらないと怖いです。

どうぞ何らかの行動に出て下さい。

自分の心の中に沁み込むものというのは、自分の行動によって裏付けられる。

次回は是非、「こういう行動を先月しました・・・」と皆さんに発表して戴けるような会でありたいとお願いして、本日の私の時間は終了にさせて戴きます。

有難うございました。